

しづくの中

児玉かつ 宮城

年寄の言ひ分けなんか聞こえぬと庭隅に立つ白き苧環
雨あとの木の葉の雫きらめけばしづくの中に入りたくなる
ゴーヤーがゴーヤーの形になるまでを知らず過ぎしぬ夫が言ふまで
病弱のゆゑに喜寿まで生きのびて祝はれてをりコロナ禍の夏
丁寧、説明責任、真摯など安倍さん言へばその言葉が泣く

赤道

神保外子 埼玉

三十年雪積むやうに花咲きし団地のえごのきみな枯れにけり
食べたことおぼえてをれどカキコケコ昨夜のおかず思ひ出せない
子午線でなくて西瓜は赤道で切るべしといふ今朝のラジオは
野葡萄の花にあげはも蜂も来ず外出自粛いつまで続く
夜々をおやすみなさいと神棚の夫に寝顔をさらして眠る

キウイフルーツ

大西淳子*千葉

長雨のあしたいよいよ獣めくキウイフルーツ怖れつつ切る
十三時、十四時を過ぎ歪みだすダリの時計に似る腹時計
十時間ものを食べずに働けばマシーンと化し尖る指先
何でもいけれど食べねばへ生きる〜という選択だけはしてコンビニへ
閉じかけたドアに右手を差し入れるふたたび開くこと疑わず

メール

小倉

敬* 神奈川

入院の友へのメール 長文へ返す言葉を打ちては消しぬ
一行に手術は無事に終わったと友からメールまだ痛からん
へ病棟を二周、歩いて回ったと二行のメールにみなぎる命
退院をしたとの知らせはなきままに一週間がまた過ぎてゆく
頑張れと書けずに送る闘病の友へのメール 今日我真夏日

あの人だらう

黒石

孝 新潟

合歓咲けば夏の陽を浴び遊びたし不要不急の人出となりて
安倍さんに似て来たと言はれフンツと返す現職十年、まだもう少し
帰省出来ぬ困窮学生吾子に送る夏のマスクとふるさとの米
農道に鳳仙花咲かせ世話するはあの人だらう杖突きて来ぬ
年ごとに畝の数減る山畑に夏来て老女ひとり鋤振る

山下

山下

佐保 新潟

息をせぬ少年の目に微かなる水滴が見ゆきら星のごと
七夕の視聴覚室四時間目 彼と最後に会ひし日忘れず
幾たびも弔問客にむせび泣くその母の肘にそつと触れたり
「藤木」とか「亜希子」と教師を呼び捨てにせしがいつでも名前を言ひき
「先生」と呼ばざりし子はいつもわれを「山下」とだけ見てくれてをり

花ばあちやん

榛葉貞代 静岡

縁側に花ばあちやんが座りゐて一句ひねれり 柿の葉ひらり
昨日見て今日もまた見る 柿雌花くるりんぱつとカールしてゐる
反り返り咲く山百合の花びらの黒き点々を夜思ひ出づ
掌になじむ小ぶりの包丁に持ちかへて春の鰯を背開きにする
ギユンギユンと電動ノコを使ひ終へ屋根職人は夏空の中

鏡の奥

吉田美奈子 愛知

羽化したるばかりの蟬の目の黒さ地中の闇の深さ宿して
しあはせの基準は低めがよきならむ葡萄の房にあさつゆ光る
テレワークなどとは無縁の人々がこの世を支ふ テレビを消しぬ
雑誌まで「白肅」となりしヘアサロン鏡の奥を荒梅雨はしる
手洗ひを繰り返す日々指紋うすれわれを証明するもの薄る

鍵

才野洋 京都

夕闇の色を帯びつつ向日葵は無人の苑にしづもりてゆく
雨垂れのしづかな音を聞きながら豪雨被害のニュース見てをり
流暢でない日本語で心情を吐露しつづける香港の人
鍵といふ日に二度ばかり仕事する小さき道具の小さき輝き
戦争を綴る雑誌の記事の間のカットに小さきメロン描かる

めりめり

竹内 みどり 鳥取

亡き夫をおもひて一人住むひとの窓の明かりが夜へ零れる
とどこほる時間は痛し亡きひとの窓に目をやる癖抜けきらず
亡きひとのメール残せり曖昧な不在を理解できる時まで
梅雨どきにめりめりふくらむ裏山が身震ひをして露を払ひぬ
レジスターの中の硬貨を積む指に仮想にはなき確かな重さ

舌先三寸

中村 信一 広島

宅地化のすすみて蝶や蜂の減りつひに朝々かぼちやに受粉す
町内の水田今年ですべて消え梅雨どき舞ひるし燕も消えぬ
聞きなれぬ「盤寿の祝」八十一歳将棋の盤の升目なるほど
チヨーク一本舌先三寸の元教師に分らぬことばかりオンライン授業も
改憲を謀る政治家コロナ禍を出しにまたぞろ顔を出しそむ

男衆の粹

栗山 由利 福岡

この夏の博多にないもの飾り山、法被姿の男衆の粹をどし
つぎの角曲がれば夏をひつさげた飾り山なしコロナの今年
たうとつに在宅ワークの夫がゐるかういふものか老いの暮らしは
ついさつき猫の頭をなでた手で夕餉の鯛の頭を落とす
束縛をわすれた足がハイカットブーツの中で自由を求む